

## 史料紹介

### 有川喜内家文書と赤玉神教丸



赤玉神教丸(有川市郎兵衛家家文書)

有川喜内家は、近世には近江国坂田郡上矢倉村(現、滋賀県彦根市鳥居本町)に居を構えていた家です。鳥居本の有川家といえば、腹痛・食傷・下痢止めの薬として有名な「赤玉神教丸」の製造元である有川市郎兵衛家が有名ですが、正徳六年(1716)に初代有川市郎兵衛が没した後、長男・金右衛門が分家として市郎兵衛家の元祖となり、次男の喜内が本家を継いだとされています。

上矢倉村は、近隣の鳥居本村・西法寺(さいぼうじ)村・百々(どど)村とともに、中山道の宿場である「鳥居本宿」を構成していました。そのため、上矢倉村にも中山道を行き交う大勢の旅人たちが立ち寄ったのであり、有川市郎兵衛家はこうした旅人たちを相手に赤玉神教丸を商っていました。そして、赤玉神教丸の評判は、旅人たちを通じて全国へと広まっていたのです。

市郎兵衛家の本家にあたる喜内家にも、赤玉神教丸の製造・販売をめぐる史料が伝わっています。その一つが、天明八年(1788)の「譲り申一札之事」という表題の史料であり、ここでは市郎兵衛家に大津の出店を相続させるべき男子がいないので、同店を喜内家に譲ると定められています。また天明二年、市郎兵衛は赤玉神教丸の偽物について奉行所に訴え出ているのですが、その際の訴状も喜内家文書の中に見られます。この訴状によれば、赤玉神教丸の偽物は、江戸・京都・大津など各地で盛んに出回っていたようです。

江戸の大田南畝(蜀山人)の享和元年(1801)「壬戌紀行」によれば、鳥居本でも「仙教丸」や「神告丸」といった、赤玉神教丸と紛らわしい名前の薬が売られていたようです。また「神おう丸」や「神明丸」「神上さん(散)」「神おうさん」「神孝丸」などという薬もあったとする史料も見られ、こうした事例は前近代の「商標・商号権」のあり方を考える材料にもなるでしょう。

※有川喜内家文書は、故有川紀久氏より寄託されました。また、赤玉神教丸については宇佐美英機「近世薬舗の『商標・商号権』保護」(附属史料館『研究紀要』第30号、1997年)も参照。

(史料館 青柳周一)